

## 唐・陳鴻の「長恨歌伝」を和文化した平安・源俊頼 『俊頼髓脳』の「長恨歌伝」

竹村，則行  
九州大学：名誉教授

<https://doi.org/10.15017/2740952>

---

出版情報：中国文学論集．48，pp.19-35，2019-12-25．九州大学中国文学会  
バージョン：  
権利関係：



# 唐・陳鴻の「長恨歌伝」を和文化した

## 平安・源俊頼『俊頼髓脳』の「長恨歌伝」

竹村 則行

### 一 はじめに

周知のように、平安の著名な歌人源俊頼（一〇五五？―一二二九？）の歌論書『俊頼髓脳』中に、源道濟（？―一〇一九）の和歌「思ひかね別れし野べを来てみれば浅茅が原に秋風ぞふく」を示し、それが詠まれた背景の説明として、漢字かな交じり文による長文の楊貴妃故事が述べられる。故事は一部に表現の相違を含むものの、明らかに唐・陳鴻の「長恨歌伝」に拠ってこれを全体的に和文化したものである。本稿では、この文章を仮に「和文化した『長恨歌伝』」と称することに<sup>①</sup>する。この「和文化した『長恨歌伝』」は、原拠の漢文（中国文）の「長恨歌伝」を単に逐語的に忠実に和文に翻訳したものではない。そのように見られる箇所も無い訳ではないが、多くは和文の作者によって、新しい環境（即ち『俊頼髓脳』）に相応しく固有名詞、人物の行動や目的等が随意書き換えられている。新しく未知の要素が書き込まれることも珍しくないが、全体では原拠の陳鴻「長恨歌伝」の枠組みを大きくは逸脱していない。

拙稿においては、この原漢文と新和文の双方における表現の相違と相似の箇所に注目したい。そこには、作者（引用者つまり源俊頼）の表現の取捨選択方針が露呈していると考えるからであり、更に削除や追加した部分を子細に検討することによって、原中国唐代文学と新日本中世文学の理念の相違を析出することも可能ではないかと推測するからである。大言すれば、新日本中世文学の作者が原典の何を削除し、何を付加したかによって、作者の「長恨歌伝」観がより明白になるであろうし、延いては日中文化の審美観の比較分析にも繋がるものと考ええる。更に作者が参照

唐・陳鴻の「長恨歌伝」を和文化した平安・源俊頼『俊頼髓脳』の「長恨歌伝」

したのである。漢籍についても、特に新しい文化国家の建設に意を注いだ平安初期においては考慮すべきである。

これまで学界における『俊頼髓脳』の当該楊貴妃故事の出典の調査は、『長恨歌伝』を始めとして細部にわたって調査されており、既に相当の研究成果を積んでいる、ただ、更に一步踏み込んだこのような試みは、管見の限り、先行研究の蓄積に乏しいように見える。従ってこの方向の研究成果も学界での評価も芳しくないが、ここで、他の同様な事例である『今昔物語集』<sup>2)</sup>『唐物語』『太平記』における「和文化した『長恨歌伝』」の比較分析結果(別稿を予定)も総合し、中国中世の一作品が日本中世文学に与えた影響の仕方について、初歩的ながら系統的包括的に分析と検討を試みることは、筆者の無知浅学はさておいて、それ相当に意義あることではあるまいか。

## 二 唐・陳鴻の「長恨歌伝」と白居易の「長恨歌」の相違

この章では、まず比較対象の一方である中国文学の著名な二作品、唐・陳鴻の「長恨歌伝」と白居易の「長恨歌」について、作品成立の背景や作品のテーマ等に関して、後の論述の便のために、贅述を恐れず、ここで関連する事実を確認しておきたい。周知の二作品であるが、それぞれの内容を子細に検討すると、白居易が『白氏文集』において、「長恨歌」と共に「長恨歌伝」を併録した理由が垣間見えてくる。<sup>3)</sup>

千二百年以上も前、「長恨歌伝」や「長恨歌」が中国文学史上稀に見る幸運な状況下で詠まれたことは、陳鴻「長恨歌伝」の末尾に付した作品成立の経緯説明から具体的に知ることができる。則ち、

(大意) 時は元和元年(八〇六)十二月、所は長安西郊の整屋(今日の周至)県である。この地に居住(隠遁)する陳鴻

と王質夫は、新しく長安から赴任して来た県尉白居易(三十五歳)の歓迎宴を土地の名刹仙遊寺において開いた。道中、馬嵬が比較的近いこともあり、三人の話題は丁度五十年前の七五六年に馬嵬で惨殺された楊貴妃の故事に及んで大いに話はずみ、互いに感歎した。すると、王質夫が酒杯を挙げて言った、「楊貴妃故事のような滅多にない出来事も誰か俊才の文人が記録に止めておかないと、やがて社会から忘れ去られてしまう。白樂天は詩が上手く情に厚い詩人だし、この楊貴妃の故事を一篇の詩歌に詠んだらどうだろうか」と。そこで白居易が

「長恨歌」を詠んだ。その趣意は、ただ楊貴妃故事の顛末に感嘆するだけでなく、前途ある士人が屢々「尤物」(美女)に迷って人生を誤る事に懲り懲りし、その惑乱を未然に防ぎ、将来の教戒としようとしたものである。「長恨歌」が完成すると、陳鴻にこれを散文の伝奇小説に仕立てさせた。

ここに述べられる「玄宗と楊貴妃の愛情」、特に楊貴妃を失った玄宗の「恨」に特化して描いた白居易の七言古詩「長恨歌」と、通常の「伝奇小説」たる陳鴻の「長恨歌伝」の間には、玄宗と楊貴妃の愛情表現を巡って微妙な認識の差異が認められるが、白居易はそのことを承知の上で、当初から「白氏文集」卷十二の「長恨歌」と陳鴻の「長恨歌伝」を併載したものと思しい。その後の日中文学における「長恨歌」「長恨歌伝」の受容と影響を考える際に、当初からしつらえてあったと思われる両作品の基本的な差異を予め認識しておくことは極めて重要である。そこで以下に両篇の顕著な差異点を十一例挙げ、やや詳しく検討しておきたい。

【「長恨歌」(以下「白歌」と簡稱)と「長恨歌伝」(以下「鴻伝」と簡稱)の表現の顕著な差異十一例】

一 開元中、泰階平、四海無事(鴻伝)。⇓ 漢皇重色思傾国 御宇多年求不得(白歌)

(差異)冒頭書き出しである。「鴻伝」は「開元」と唐代王朝名を明記するが、「白歌」は「漢皇」とするのみで人名を明記しない。以下双方とも全篇概ねそのようであり、「鴻伝」が史実を明記する一方、「白歌」は時間空間の具体設定を避ける傾向がある。このことは、「鴻伝」の客観描写と「白歌」の主観(主情)描写の相違に直結する。

二 元献皇后・武淑妃(鴻伝)⇓ (白歌)無し。

(差異)上記一同じく「鴻伝」は実名を明記する。

三 詔高力士潜搜外宮、得弘農楊玄琰女于寿邸。既笄矣。(鴻伝)⇓ 楊家有女初长成 養在深窓人未識(白歌)

(差異)「鴻伝」は楊貴妃が玄宗妃前に既婚(寿王妃)であった史実を淡々と述べるが、「白歌」は深窓の処女の純潔を強調する。世間では常識であったであろう玄宗謁見以前の楊貴妃の既婚歴(「鴻伝」と、あくまで

唐・陳鴻の「長恨歌伝」を和文化した平安・源俊賴『俊賴髓腦』の「長恨歌伝」

純潔に拘る「白歌」との、楊貴妃像描写の決定的な差異が見て取れる。

四 定情之夕、授金釵鈿合以固之（鴻伝）。⇓空持旧物表深情 鈿合金釵寄将去（白歌）

（差異）「白歌」では金釵鈿合が玄宗の楊貴妃への結婚記念贈品である記載が無いが、「鴻伝」ではそのことを明記する。「長恨歌」の描写では仙女楊貴妃が取り出した金釵鈿合の重要さが分からないので、ここはやはり明記すべきであろう（読者が併せて「長恨歌伝」を読めば氷解する。白居易はそのことも配慮して併載したか）。

五 上益嬖焉。（鴻伝）。⇓（白歌）無し。

（差異）「嬖」は高い位の者が身分を越えて下賤の女を寵愛する意である。白居易は新樂府「李夫人」においては「嬖惑」と明記して玄宗の行為を批判する。その筆法は実は「長恨歌伝」に託され、「長恨歌」には見えない。

六 才智明恵、善巧便佞、（鴻伝）⇓（白歌）無し。

（差異）楊貴妃の人物評語として「善巧便佞」（言葉巧みに天子にへつらい）とあるのは、当時一般の楊貴妃評価と考えられる。「白歌」に楊貴妃の貶辞は無い。

七 碧衣云、玉妃方寝、請少待之。↘于時雲海沈沈、洞天飛晚、↘久之、而碧衣延入、且曰、玉妃出。（鴻伝）⇓聞道漢家天子使、九華帳裏夢中驚（白歌）

（差異）玄宗の使者（方士）は、「白歌」では速やかに楊貴妃との対面がかなうが、「鴻伝」では一晚中門前で待たされる。些細な時間差ではあるが、「鴻伝」が冷静に楊貴妃の接客行為を描くのに対し、「白歌」からは楊貴妃の玄宗への生前と変わらぬ篤い思いが直に伝わる。

八 請當時一事不聞于他人者、驗於大上皇。不然恐鈿合金釵、負新垣平之詐也。（鴻伝）⇓臨別殷勤重寄詞（白歌）（差異）「鴻伝」では、道士の強い要求によって、七夕での比翼鳥・連理枝の誓詞が導き出されるが、「白歌」では、使者の帰り際、楊貴妃が唐突に玄宗にこの言葉を託す。

九 願世世為夫婦。（鴻伝）⇓七月七日長生殿 夜半無人私語時 在天願作比翼鳥 在地願為連理枝（白歌）（差異）「長恨歌」「密誓」の有名な場面である。「白歌」は大枚七言四句を費やして二人のロマンスを歌い

上げるが、「鴻伝」は素っ気なく六言で済ましてしまう。情熱的な「白歌」と冷静な「鴻伝」の描写の相違が露呈した好例である。

十 因言、太上皇亦不久人間。幸惟自安、無自苦耳（鴻伝）。⇓（白歌）無し。

（差異）楊貴妃が帰る際の使者に托した玄宗への伝言は、「鴻伝」には有るが「白歌」には無い。

十一 天長地久有時尽 此恨綿綿無絶期（白歌）⇓（鴻伝）無し。

（差異）「白歌」の主題にも関わる有名な絶唱である。「白歌」には有るが「鴻伝」には無い。

如何だろうか。楊貴妃の既婚歴や「便佞」の性格を包み隠さず淡々と述べ、玄宗の使者を暫く待たせる「鴻伝」の冷静で客観的な史筆に対して、具体表現をばかし、深窓の閨女のシンデレラ的出世物語を強調する「白歌」の表現の対比が浮彫りになるのではないだろうか。そして「鴻伝」が白居易の意思を承け、当初から『白氏文集』上に「鴻伝」「白歌」の併載を意としていたと思われることからすれば、そこに、世間で一般常識としてよく知られた「鴻伝」をだしにしつつ、玄宗と楊貴妃の愛情物語を殊更に強調しようとする白居易の魂胆が透けて見えるのである。次章では、『白氏文集』巻十二に併載するこの両篇を平安文人が眼中にした時、散文であれば当然「鴻伝」からの強い影響が予想されるが、果たしてどのような反応を見せたか、具体的に検討したい。

### 三 『俊頼髓脳』に展開する和文化した「長恨歌伝」

以下、周知の『俊頼髓脳』中に繰々展開される楊貴妃故事が、陳鴻の「長恨歌伝」を和文化したものであることを具体的に示すために、当該資料を五段落に分け、梗概と共に、出拠である「長恨歌」「長恨歌伝」の該当句を煩を厭わず（ ）中に付して提示することにする（「」は筆者の仮題、各段落の前後に、筆者による（梗概）と（筆者評）を付する。「鴻伝」は陳鴻「長恨歌伝」、「白歌」は白居易「長恨歌」の簡称である）。

原文は、和歌「思ひかね別れし野べをきてみれば浅茅が原に秋風ぞふく」を提示した後、「これは、楊貴妃が事を唐・陳鴻の「長恨歌伝」を和文化した平安・源俊頼『俊頼髓脳』の「長恨歌伝」

詠めるなり。」と説明した後に、「楊貴妃といへるは、昔、もろこしに、…」で始まる楊貴妃故事（長恨歌伝）を延々と述べる。末尾の「その楊貴妃が殺されける所へ、…かのみかどの、御心のうちを、おしはかりて詠める歌なり」は、ここでは比較の対象としない。

# 第一段落「貴妃寵愛」

（梗概）二人の寵妃を続けて亡くした玄宗が、前妃に勝る美貌の楊貴妃をついに後妃として採し出し、寵愛をほし、いままにして、本務の政治を顧みなくなる。やがて楊貴妃の兄の楊国忠が政權を壟断するようになる。世間には、楊貴妃にあやかつて運良く出世する女兒の誕生を望む風潮が生まれる。

楊貴妃といへるは、昔、もろこしに、玄宗と申すみかどおはしけり。もとより、色をなむ好み給ひける。（鴻伝云、玄宗在位歳久：以声色自娛。）（白歌云、漢皇重色思傾国）いみじうあひし給ひける、女御、后なむおはしける。妃をば、源憲皇后といひ、女御をば、武淑妃となむ聞えける。いみじう、あひおぼしける程に、とりつづき、二人ながら亡せ給ひにけり。（鴻伝云、先是元獻皇后・武淑妃皆有寵、相次即世。）それ、おぼしめし嘆きて（鴻伝云、上心忽忽不樂。）、これらに似たる人やあると、もとめ給ふ程に、やうやう、楊元琰といへる人のむすめありけり。（鴻伝云、潜搜外宮、得弘農楊玄琰女于寿邸。）容姿、世にすぐれて、めでたくなむおはしける。（白歌云、天生麗質難自棄）みかど、これを聞こし召して、むかへとりて御覧じけるに、はじめおはしける女御、妃にもまさりて、めでたくなむおはしける。三千人の寵愛、一人なむおはしけるを（白歌云、漢宮佳麗三千人、三千寵愛在一身、もてあそび給ひけるほどに、世の中の政治をもし給はず。春は、花をとにもてあそび、秋は、月をとにも御覧じ、夏は、いづみをあひし、冬は、雪をふたり見給ひき。これより、御いとまなく、この女御の御兄の、楊国忠といへる人になむ、その政治をばまかせて、せさせ給ひける。（鴻伝云、天宝末、兄国忠盜丞相位、愚弄国柄。）これより、世間なむ、いみじう嘆きていひける。「世にあらむ人は、をのこごをばまうけずして、女子をなむまうくべき」とぞいひける。（鴻伝云、当時謠詠有云、生女勿悲酸、生男勿喜歡。）（白歌云、遂令天下父母心、不重生男重生女）

…（評）『俊頼髓脳』が玄宗の前妃名を明記するのは、明らかに「鴻伝」による。文体上当然ではあるが、文章

体の『俊頼髓腦』は表現を主に「長恨歌伝」に依拠し、この箇所においては「長恨歌」の「三千寵愛在一身」に依拠した表現は「三千人の寵愛、一人なむおはしける」だけであるが、全体として「長恨歌」の表現が底にあることは言うまでもない。玄宗が楊貴妃と歡樂を重ねる場面（及び次の第三段落の楊貴妃を追憶する場面）が、「鴻伝」では「驪山雪夜、上陽春朝、…宴專席、寢專房」と描くのに対し、『俊頼髓腦』が「春は花を、…秋は月を、…夏はいづみを、…冬は雪を…」（第三段落は、毎至春之日、冬之夜、池蓮夏開、宮槐秋落）というように具体的に描くのは、四季の移ろいに敏感な日本平安文化の顕現であると言えまいか（第三段落の玄宗が楊貴妃を追憶する場面も同様である。第三段落の評に補述する）。この場面は「長恨歌」では二人の歡樂場面を春景、及び玄宗の楊貴妃追憶場面を秋景を背景に描き、二人の永遠の愛情を効果的に演出するが、四季の風景を分別して描く訳ではない。当時楊貴妃の出世にあやかり、民間に女兒の誕生を望む風潮や謠言が流行した事については、「鴻伝」がこれを民人の楊貴妃への反感例（側目）として描くのに対し、「白歌」は出世した楊貴妃への羨望例として描く。「白歌」に楊貴妃への反感は乏しいようだ。

## 第二段落「貴妃殺害」

（梗概）楊貴妃のせいで世が乱れたと判断した安祿山が、みかどの漁陽行幸の際に反乱を起こし、天下平和のために貴妃の殺害を申し出る。みかどは惜しまず楊貴妃を与え、安祿山がみかどの御前で楊貴妃を殺す。みかどはこれを見て、涙を流す。

かく、世の中なむ騒ぎけるを聞きて、世人の心にしたがひて、安祿山といふ人、いかでみかどをあやぶめたてまつりて、この女御を殺さむと思ふ心ありけり。漁陽といへる所にあそばせ給ひける程に、この安祿山、いくさを起し（白歌云、漁陽鼙鼓動地来、ほこをこしにさして、御輿のさきに伏して、申しけるやう、「ねがはくは、その楊貴妃を賜ひて、天下のいかりをなごめむ」（鴻伝云、請以貴妃塞天下之怒。）と申しければ、みかど、惜しみ給はずして、この女御を賜ひてけり。安祿山、賜はりて、帝の御前にして、殺してけり。みかど、これを御覧じて、肝心まどひて、涙よもにながれて、見給ふにたへずぞありける。（白歌云、君王掩眼救不得、迴看淚血相和流）

…（評）安祿山の拳兵と楊貴妃の殺害を述べたこの部分は、史実と大きく異なる。即ち、世直しの善人安祿山

像と玄宗の漁陽行幸と安祿山による楊貴妃殺害がそうである。まず世直しの義拳を企てた安祿山である。その理由は悪人楊国忠や楊貴妃を退治しようとする安祿山にあると思われるが、他の諸書になく、珍しい、恐らくは誤った安祿山認識である。筆者はその理由を、当時作者が「鴻伝」及び「白歌」(いずれも『白氏文集』卷十二所収)のみを参照して和文の「鴻伝」を執筆したのではないかと推測する。また、楊貴妃殺害の下手人を安祿山とする事については、楊貴妃が安祿山の乱の渦中において惨死したことは容認できるものの、「白歌」「鴻伝」共に貴妃殺害の下手人は明記しない。『資治通鑑』卷二二八や『楊太真外伝』卷下が高力士に殺害させているのと大きく異なるが、和文「鴻伝」の作者は恐らくこれらの記事を事前に把握認識すること無く、悪女を退治する世直しの一環として、安祿山に楊貴妃殺害をさせたことが考えられる。

更に、眼前で愛妃を殺された玄宗の反応描写について、玄宗が楊貴妃を即座に安祿山に渡したことは、その後の玄宗の篤い貴妃追憶と矛盾するし、中国側文献では寡聞にして見られない。作者の創作説話だろうが、玄宗がここで何らかの躊躇や抵抗を見せた方が玄宗の楊貴妃への愛着をリアルに表現できるのではないか。

### 第三段落「玄宗の貴妃追憶と道士の貴妃探索」

(梗概) 玄宗が楊貴妃を追憶する。その様子を見て、道士が名乗り出て貴妃の靈魂の在処をくまなく探索する。

かくて、都に帰り給ひて(鴻伝云、大駕還都。)(白歌云、東望都門信馬帰。)位をば、東宮にゆづり給ひにけり。この事、思し嘆きて、春は、花のちるをも知らず、秋は、木の葉の落つるをも見給はず。木の葉は、庭につもりたれど、あへてはらふ人なし。(鴻伝云、每至春之日、池蓮夏開、宮槐秋落、。)(白歌云、落葉滿階紅不掃)かく、思し嘆くを聞きて、まぼろしといへる道士の、参じて申さく、「我がみかどの御使として、この女御の、おはし所を尋ね侍らむ」と申しければ、(鴻伝云、適有道士自蜀来、知皇心念楊妃如是、自言有李少君之術。)(みかど、大きに喜びてのたまはく、「しからば、我がために、この人のあり所を、尋ねて聞かせよ」とのたまふ。(鴻伝云、玄宗大喜、命致其神。)(このみことのりを承りて、上は太空をきはめ、下はそこ根の国までもとめけれど、終に、え尋ね得ずなりにけり。(鴻伝云、又能游神馭氣、出天界、没地府以求之、又不見。白歌云、上窮碧落下黄泉、兩處茫茫皆不見)

…(評) 玄宗が亡き楊貴妃を追憶する場面は、「鴻伝」では四季を通じてであるが(每至春之日、冬之夜、池蓮夏開、

宮槐秋落、「白歌」では春色を背景にした二人の恋愛の歓楽、秋景の中での玄宗の楊貴妃追憶というふうにも明確に描き分けている。

#### 第四段落「道士の貴妃訪問」

(梗概) 道士が遂に楊貴妃の住む仙院を探し当てるが、時間外のため、一晚中玄閑脇で待たされる。

ある人のいはく、「ひんがしの海に、蓬萊といふ島あり。その島の上に、大きな宮殿あり。(鴻伝云、東極大海、跨蓬壺、見最高仙山。)(白歌云、忽聞海上有仙山)そこになむ、玉妃の大真院といふ所あり。(鴻伝云、署曰玉妃太真院。)それになむおはする」といひければ、尋ねていたりにけり。その時に、山の端に、日やうやういたりて、海のおもて、くらがりゆく。(鴻伝云、于時雲海沈沈、洞天日晚)花のとびらも、みなたてて、人の音もせざりければ、(鴻伝云、瓊戸重闔、悄然無声)この戸をたたきけり。(鴻伝云、方士抽簪叩扉)(白歌云、金闕西廂叩玉扇)青ききぬ着たる乙女の、鬢づらあげたる、いで来たりていはく、「汝は、いかなる所より来たれる人ぞ」。(鴻伝云、俄有碧衣侍女至、詰其所從來)まぼろし、答へていはく、「みかどの御使なり。申すべきことのあるにより、かくはるかに、尋ねきたれるなり」。(鴻伝云、方士因称唐天子使者、且致其命)この乙女のいはく、「玉妃、まさに寝給へり。ねがはくは、しばらく待ち給へ」。(鴻伝云、玉妃方寝、請少待之)その時、まぼろし、てを手向けてゐたり。(鴻伝云、方士屏息斂足、拱手門下)

…(評) 第二章において指摘したように、「白歌」と「鴻伝」では遠来の使者への対応が大きく異なる。即ち、「白歌」では使者の来訪を聞いた楊貴妃は化粧も整えぬまま玄閑まで転び出て来るが、「鴻伝」では貴妃就寝中として使者は一晩待たされる。それだけ「白歌」は楊貴妃の玄宗への鐘情を篤く描くが、この部分では使者は待機を余儀なくされており、作者が「鴻伝」によって描いたことが明らかである。この違いは重要である。

#### 第五段落「楊貴妃の玄宗追憶」

(梗概) 道士を召見した楊貴妃が玄宗との七夕の思い出を語る。

夜あけて、このまぼろしを召しよせて、(鴻伝云、久之、而碧衣延入)玉妃のたまはく、「帝王は、平かにおはしますや、いなや。(鴻伝云、問皇帝安否)次には、天宝十四年よりこのかた、今日に至るまで、いかなる事がある」。

唐・陳鴻の「長恨歌伝」を和文化した平安・源俊賴『俊頼髓脳』の「長恨歌伝」

(鴻伝云、次問天寶十四載已還事。)まぼろし、その間の事を語り申しけり。帰るなむとしける時にのぞみて、玉のかんざしをなむ、つみ折りて賜はせける。「これを持ちて、みかどにたてまつれ。昔の事、これにて思しいでよ」となむ申しける。(鴻伝云、指碧衣女取金釵鈿合、各折其半、授使者曰、為我謝太上皇、謹獻是物、尋旧好也。)(白歌云、空持旧物表深情、鈿合金釵寄将去)まぼろし申さく、「玉のかんざしは、世にある物なり。これをたてまつらむに、我が君、まことと思し召さじ。ただ、昔、君と忍びて語らひ給ひけむ事の、人にしらぬ侍りけむ。それを申し給へ。さてなむ、まこととは思し召すべき」と申しければ、(鴻伝云、請當時一事不聞于他人者、驗於太上皇。)(白歌云、臨別殷勤重寄詞、詞中有誓兩心知)楊貴妃、しばらく思しめぐらして、のたまはく、「われ、むかし七月七日に、七夕あひ見し夕に、みかど、われに立ちそひてのたまはる事は、たなばた、ひこほしのちぎりあはれなり。われもかくあらむと思ふ。もし、天にあらば、翼をならべる鳥とならむ。地にあらば、ねがはくは、枝をかはしたる木とならむ。天も長く、地も久しく、終る事あらば、この怨は、綿々として絶ゆる期なからむ。と申せ」と、語らひ給ひける。(鴻伝云、玉妃茫然退立、若有所思。徐而言曰、昔天寶十載、侍輩避暑驪山宮。秋七月、牽牛織女相見之夕、…上凭肩而立、因仰天感牛女事、密相誓心。願世世為夫婦。)(白歌云、七月七日長生殿、夜半無人私語時。在天願作比翼鳥、在地願為連理枝。天長地久有時盡、此恨綿綿無絕期)帰りて、この由を奏しければ、みかど、大に悲しび給ひて、つひに、悲しびに堪へずして、幾程もなくて亡せ給ひにけりとぞ。

…(評)有名な「比翼鳥、連理枝」の誓詞もこの時のものであるが、この誓詞自体は、「白歌」と違って「鴻伝」にはなく、「願世世為夫婦」とあるのみである。一連の筆遣いがそうであるが、こども二人の深い愛情を描き通そうとする「白歌」と、努めて客観的に描こうとする「鴻伝」の筆遣い違いが如実に現れている。

加えて、「鴻伝」ではなく「白歌」の解釈の問題であるが、作者は「白歌」の末尾句を引用しつつ、「天も長く、地も久しく、終る事あらば、この怨は、綿々として絶ゆる期なからむ。」と述べる。この句は、「永遠に続く天地でさえ何時かは終わることがあるだろうが、この怨みは長く続いて決して消えることは無い」ことを比喩的に述べたものである。終る事あらばこそとして、こそその二字を補えばともかく、そうでなければ、国東文麿氏の指摘するように誤訳を指弾されかねない箇所である。<sup>9)</sup>

#### 四 和文化された「長恨歌伝」の再検討

この章では、前章において調査した源俊頼の「和文化した長恨歌伝」の表現内容が原拠の陳鴻の「長恨歌伝」と異なる問題を、以下の四点に絞って再度総合的に検討したい。

- (1) 安禄山像、拳兵目的、楊貴妃殺害者等の認識
- (2) 長安帰還後に玄宗が馬嵬へ墓参した史実は無い
- (3) 漢語「道士」「方士」と和語「まぼろし」について
- (4) 「天長地久有時尽 此恨綿綿無絶期」の話者、「長恨歌」の主題の問題

(1) 安禄山像、拳兵目的、楊貴妃殺害者等の認識  
『俊頼髓脳』中の「和文化した長恨歌伝」(以下「俊伝」と簡稱)における安禄山描写は、史実の裏付けに乏しく異様である。即ち、「俊伝」は安禄山拳兵の目的を、「楊国忠の専權によつて騒乱した世間を正すべく義拳し、楊国忠の行為の危険性をみかどに知らしめるために、妹の楊貴妃殺害を画策した」とする。しかし、多くの史書は、安禄山拳兵の目的として楊国忠の排除は掲げるものの、その為に当初から妹の楊貴妃殺害を画策したとは記録しない。また楊貴妃の殺害者として高力士を挙げる記録は存在するものの、安禄山を直接の下手人とするものは聞かない。その安禄山が拳兵したのは、「俊伝」では天子の一行が「漁陽へ行幸」した機会を狙つてとするが、これも史実が無く、誤認である。或いは范陽節度使安禄山の赴任地の范陽(漁陽)を誤引したものか。楊貴妃の生命の引き渡しを要求したのは警護隊長の陳玄礼との資料は存在するが、まさかそれが安禄山の唐突な要求で、しかも玄宗が楊貴妃をやすやすと安禄山にくれてやるような記事は、筆者の浅い見聞でも中国側の記録に見たことが無い。この珍現象は何に由来するのか。それは、「俊伝」をよく読めば自ずと分かるであろう。つまり、安禄山は、楊国忠一族の横暴で「世の中なむ騒ぎけるを聞きて、世人の心に従ひて」反乱したのであり、この段階での行動は世直しの義拳であつて、安禄山は畢竟善人なのである。例えば『旧唐書』卷二〇〇上、安禄山伝に「性巧黠」と記録する悪賢い安禄山

はここには登場しない。このことの原因は、作者が他書の安祿山記事を参照せず、或いは事情で参照できず、専ら陳鴻の「長恨歌伝」のみに拠つて安祿山像を描いたことに帰するのではないか。事実、該博な漢籍の知識を披瀝する後世の『太平記』では安祿山認識がほぼ現代のそれに近く、安祿山の挙兵に懐疑的である。

(2) 長安帰還後に玄宗が馬嵬へ墓参した史実は無い

至徳二載(七五七年)十二月、玄宗(明皇)は、一年半前に慌ただしく土盛りした楊貴妃墓のある馬嵬を経由して長安へ帰着する。その後、明皇側は度々楊貴妃墓の改葬の為の馬嵬墓参を今上肅宗に申し出るが、旧勢力の復活を警戒する肅宗周辺の反対に遭い、墓参や改葬が実現する事は無かった。僅かに翌七五八年十月、縁の深い華清宮訪問が認められたに過ぎない。

にもかかわらず『俊頼髓脳』は、「その楊貴妃が殺される所へ、おはしまして御覧じければ」として情況を設定する。これは如何なる理由に拠るか。源俊頼が新たな資料に基づいて描いたというよりも、そうありたいとする作者の願望が働いたと考えるべきであろう。また、長安と馬嵬の約六十kmの距離が如何にも程近い郊外のように描くのも、実測に基づかない作者の執筆環境を反映するようである。源道済の本和歌が「不見玉顔」とする「長恨歌」句に基づくことは後述する。

(3) 漢語「道士」「方士」と和語「まぼろし」について

馬嵬乱後に天宮に帰り住む仙女楊貴妃のもとへ、楊貴妃を忘れられない玄宗の意を承けた特別の使者が訪問して楊貴妃と対話するくだりは、「長恨歌」「長恨歌伝」ともに重要な場面設定であり、多くのテキストが「道士」「方士」が登場するその場面を活写する。実は、和文化された「長恨歌伝」の幾つかの作品では、使者名を漢語の「道士」「方士」でなく、和語の「まぼろし」とする。「和文化した『長恨歌伝』に含む四作品中では、『俊頼髓脳』は「まぼろし」、『今昔物語集』は「方士」を用い、『唐物語』は「まぼろし」「方士」を混用、『太平記』は「方士」を使用する。このほか、著名な作品では、『源氏物語』に「幻」巻があり、冒頭の「桐壺」巻において、楊貴妃に擬した桐壺の死を悼んで、みかどが「たづね行くまぼろしもがなつてにても魂のありかをそこしるべく」と詠むのは、『源氏物語』の後世への甚大な影響から考えても特筆すべき現象である。更に仙女楊貴妃を主役とする謡曲

『楊貴妃』では、使者は「方士」を自称する。このうち、『唐物語』『太平記』における称呼については別途論文に於いて考えたいが、これらの称呼の違いには作者の何らかの意図があるのか、また「まぼろし」を使用する文学的効果は如何だろうか。語源説明に詳しい『日本国語大辞典』（小学館）によると、幻術使いたる「まぼろし」の語源は「目惚し」（大言海）や「見滅し」（釈名）、「目亡」（名言通他）等諸説あつてはつきりしないが、大切な観点は現実・実在（うつ）に対する非現実・非実在（ゆめ）として使用されることである。楊貴妃故事では、仙女楊貴妃と対話する幻術使い「まぼろし」は真つ当な使用方法である。日本の「まぼろし」が中国の「道士」「方士」同様に「現実」において活躍したか、筆者の知見は乏しいが、少なくとも文学上においては、『源氏物語』の使用例もあり、「まぼろし」の使用頻度は相当程度あつたと推測される。そしてその用語が「幻」であるが故に、「まぼろし」は決して当該社会において現実化することなく、文学上の虚構の存在に終始したことも。かくして、日本文学における「まぼろし」は、当人の現実世界における活動はいざ知らず、楊貴妃故事の翻案においては実に要領を得た見事な「和文化した」用語であつたと言えるのではないか。

（４）「天長地久有時尽 此恨綿綿無絶期」の話者、「長恨歌」の主題の問題

楊貴妃が使者の帰り際に玄宗への伝言を託す「天長地久有時尽 此恨綿綿無絶期」語は、「長恨歌」の最末句であるが、この句の話者や「長恨歌」の主題をめぐって古来議論が絶えない微妙な箇所である。『俊頼髓脳』では話者を楊貴妃とする<sup>⑤</sup>。これは「長恨歌」の一解釈であるが、国東文麿氏が指摘するように、この箇所は「天地はいかに長く続いても終わりがあがるが、この恨みは決して絶える時がない」方向で解釈すべきであり、『俊頼髓脳』（また『今昔物語集』）の誤訳を指弾されかねない微妙な箇所である。

五 まとめ

以上に検討したように、『俊頼髓脳』に引用する長文の楊貴妃故事本文（楊貴妃といへるは、昔、もろこしに、玄宗と申すみかどおはしけり。うつひに、悲しびに堪へずして、幾程もなく亡せにけりとぞ。）においては、概ね忠実に陳鴻の「長恨歌伝」

唐・陳鴻の「長恨歌伝」を和文化化した平安・源俊頼『俊頼髓脳』の「長恨歌伝」

を和文化している。具体的な日時は不明だが、引用者は、九世紀前半頃日本にもたらされ、一世を風靡した『白氏文集』（またはその抄本）に併載する陳鴻「長恨歌伝」を専ら当面の手本にしたであろう。

『俊頼髓脳』原文は続いて、源道済の和歌成立の背景について、次のようにまとめる。

その楊貴妃が殺される所へ、おはしまして御覧じければ、野辺に、あさち、風に波よりて、あはれなりけむと、かのみかどの、御心のうちを、おしはかりて詠める歌なり。

つまり、長安へ帰京した玄宗（明皇）が楊貴妃を忘れかね、その殺された馬嵬へ行ってみると（思ひかね別れし野べをきてみれば）、一面の波立つ浅茅が原の風景に、さぞかし堪え難かったであろうとして、明皇の心中を付度して詠んだ和歌であるというのである。この原話を収録したという『今昔物語集』もほぼ同様である。では、果たしてこの解釈は問題ないだろうか。特に「おはしまして」とする玄宗の行動の出発点は、帰京した長安からでよいのだろうか。玄宗には果たしてそのような行動の記録が認められるだろうか。筆者の狭い管見では、長安へ帰京した玄宗（の旧勢力）は長子たる今上皇帝の肅宗（の現政治勢力）と折り合いが悪く、楊貴妃墓の墓参や改葬は許可されず、僅かに七五八年十月、東郊の華清宮への湯治が許可されたのみであった。実は、原作和歌を『源道済集全釈』<sup>15</sup>に拠って見ると、当該和歌には「不見玉顔」の句題が付いており、他の九題ともに「長恨歌」の「不見玉顔空死処」に出拠した句題和歌であることが分かる。つまり玄宗の馬嵬墓参の実態は、帰京後に長安から出発したのではなく、「長恨歌」に「不見玉顔空死処」とあるように、蒙塵先の四川から長安へ帰還する途中に楊貴妃墓を見参したのであり、間もなく長安へ帰着する馬嵬において、一年半前に亡き楊貴妃を埋葬したことを回想して詠んだ和歌なのである。「長恨歌」に基づけば、玄宗が長安から馬嵬へ墓参に出かけたとは解釈できないであろう。

唐朝の安祿山の乱の公的情報は、海賊など民間個人の風聞はいざ知らず、叛乱勃発二年後の天平宝字二年（淳仁天皇 七五八）十二月に、遣渤海使小野朝臣田守等が上奏した「唐国消息」によって我が国にもたらされた。即ち、『続日本紀』巻二十一に、至徳三載（七五八）に至る、史思明の乱を含むかなり細かな反乱の「消息」が報告されており、<sup>16</sup>淳仁天皇は、「安祿山は狂胡狡豎」（狂乱したずるい奴）として、「海東」（日本）侵攻に備えるように勅命を出している。（実の所、安祿山は至徳二載（七五七）正月、既に息子の安慶緒に刺殺されており、その海東侵攻また玄宗追撃は実際

は不可能であった。)

ここに、『続日本紀』が安祿山を「狂胡狡豎」と表現するのは実に興味深い。それは「性巧黠」(『旧唐書』卷二〇〇上、安祿山伝)、「伎忍」(『新唐書』卷三三五上、安祿山伝)、「姦賊残忍」(『安祿山事迹』卷上)と表現する歴代史書の安祿山評語と軌を一にするからである。これに対して、『俊頼髓脳』が世直しの善人安祿山像を描くのは如何にも唐突で異様であるが、そのことの理由としては、繰り返しになるが、当時の作者が把握した安祿山情報が「長恨歌伝」に描かれた「悪人楊国忠を誅伐した世直し善人の安祿山像」のみであった、更に言えば、この一点から作者の執筆環境としての漢籍背景の一端を窺おうとするのは筆者の穿ち過ぎであろうか。

最後に、近刊の丁莉『永遠的「唐土」日本平安朝物語文学的中国叙述』二二六頁「三、楊貴妃的故事…『浅茅原野上、唯有秋风吹』」は、平安朝の浅茅を詠んだ和歌例を博搜し、当該句を含む和歌について、次の様に分析する。

这些和歌通过『浅茅』及其相关景物——秋风、露水、虫鸣等来表现杨贵妃死后故地之荒芜以及重游故地时玄宗内心之凄凉。(これらの和歌は、『浅茅』や関連する景物——秋風、露、虫の声等を通して、楊貴妃死後の縁の地(馬嵬)の荒涼さや馬嵬を再訪した折の玄宗の心中の凄絶さを表現している。)

筆者は、後世の江戸の上田秋成(一七三四—一八〇九)『雨月物語』「浅茅が宿」に収斂する丁莉氏の日本「浅茅」観に大いに賛同するものである。ここには、「まぼろし」同様、中国の原詩に読まれた風物が日本文学において巧妙に和文化されている好個の実例を確認することができるように思う。

## 注

- (1) 「和文」は「漢文」に対する呼称であり、平仮名を中心として、奈良平安時代を通じて日本語に定着した所謂漢文(中国文)訓読文や漢字かな交じり文を包含している。なお表現は異なるが、同様の「和文化した『長恨歌伝』」は、管見の限り、本稿の『俊頼髓脳』以外に、『今昔物語集』『唐物語』『太平記』等の中世文学作品にも各バージョンで見える。(他に『曾我物語』卷二、『注好選抄』巻上も部分的に引用する。)時間と能力が許せば、これらについても個別

唐・陳鴻の「長恨歌伝」を和文化した平安・源俊頼『俊頼髓脳』の「長恨歌伝」

に別稿を用意して考察を試みたい。なお、一方の「長恨歌」も日本文学作品中に屢々引用されるが、恐らく七言古詩体の制限もあろう、日本文学作品中の「長恨歌」の引用は七言数句に止まり、決して「長恨歌伝」のように全体的なものではない。ただ『白氏文集』巻十二に併録する兩篇は、当初から同時に読まれることを期して編入されたと思われるので、本稿では「長恨歌」も考察の対象を含む。

- (2) 『今昔物語集』（編者不明）と『俊頼髓脳』の先後については、『今昔物語集』の依拠資料のうち成立が最も遅いのは『俊頼髓脳』（『日本古典文学大事典』明治書院、一九九八年六月）とあり、また古今説話の集大成と個人の和歌論集の両著の性格の違いから、筆者は、先行する『俊頼髓脳』を『今昔物語集』が取り込んだと考えている。今野達「今昔物語集の成立に関する諸問題——俊頼髓脳との関連を糸口に」（『今野達説話文学論集』勉誠社、二〇〇八年）は、『俊頼髓脳』先行の立場から更に深く関連する諸問題を検討している。

- (3) 「長恨歌」「長恨歌伝」は、岡村繁訳注『白氏文集』（二下、原稿執筆は柳川順子、明治書院、新釈漢文大系一二七、二〇〇七年）に拠った。この注釈本の底本は那波道円本だが、金沢本・管見抄本等の古抄本と照合し、必要に応じて載録している。更に加えて太田次男の名著『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究 中巻』（勉誠社、一九九七年二月）によって照合したが、見落しがあれば筆者の責任である。

- (4) 原文は「懲尤物」とあり、従来は「美女楊貴妃を懲らしめ」とする解釈が主流である。しかし、筆者はその方向の解釈に違和感があり、当時、元稹や白居易間で流行していた「尤物」語の解釈を根拠に、大意のように解釈した。ご理解いただければ幸いである。拙稿「中唐の『尤物』論と『長恨歌』の『恨』」（『日本中国学会報』第七〇集、七四—八六頁。日本中国学会、二〇一八年）参照。

- (5) 「伝」の解釈について、先行研究は説が分かれるが、筆者はこれを「唐代伝奇」文と解釈し、詩歌たる「長恨歌」とペアになるものと考ええる。

- (6) 本稿が対象とする『俊頼髓脳』は橋本不美男注訳『俊頼髓脳』（日本古典文学全集五十、歌論集、小学館、一九七五年。底本は国会図書館蔵藤原定家本）に拠った。諸般の事情により、底本は実見できていない。

- (7) 「長恨歌」の「春風桃李花開日、秋雨梧桐葉落時」は秋景の下に描かれる。春景を描く前句は一見相応しくないよう

に見えるが、筆者はこれを『前句は生前の楊貴妃との春の歡樂の日々の追憶』であり、後句が『楊貴妃逝去後の悲しい秋の現実』の描写であると見たい。

(8) 拙稿「善人安禄山の登場」(岩波書店『新日本古典文学大系』三四、『今昔物語集二』月報、一九九九年三月) 参照。

(9) 国東文麿『今昔物語集全訳注』九(講談社学術文庫、一九八四年二月) 一一八頁。また同氏『今昔物語集作者考』

(武蔵野書院、一九八五年十二月)、五十二頁。

(10) 『資治通鑑』卷二二八、『楊太真外伝』卷下、「明皇雜録」。

(11) 『資治通鑑』卷二二八等。

(12) 『今昔物語集』はやや表現が異なるが、同様の内容である。

(13) 『今昔物語集』同じ。話者を玄宗とする一方の解釈について、拙稿(前注4) 参照。因みに一方の解釈は、この二句を「長恨歌」全体の総括句とし、「此恨」の主体を玄宗とする。

(14) 『今昔物語集全訳注』九、講談社学術文庫、一九八四年二月、一一八頁。

(15) 桑原博士全訳、風間書房、昭和六十二年。

(16) 『続日本紀三』(青木和夫他校注、新日本古典文学大系十四、岩波書店、一九九二年十一月) に詳しい注を載せる。

藤善真澄『安禄山』人物往来社、一九九六年三月。また同氏『安禄山 皇帝の座をうかがった男』中公文庫、二〇〇〇年七月。同氏『安禄山と楊貴妃 安史の乱前後』清水書院、一九七二年三月。同氏『安禄山と楊貴妃 安史の乱始末記』清水書院、一九八四年十月を参照。

(17) 北京大学出版社、二〇一六年一月。

(18) チガヤ。丈の低い茅。